【 7 】

氏　名	志　村　良　治（し　むら　りよう　じ）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	論文博第 89 号
学位授与の日付	昭和 49 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	**中国中世語法史研究**
論文調査委員	（主査）教授 小川環樹　教授 入矢義高　教授 西田龍雄

論文内容の要旨

本論文は中国中世における漢語の語法と語彙について，これを語法史的観点から研究考察を行なったものである。はじめに，中世の語法と語彙を概観し，そのおもだった変化および諸特質を述べ，つぎに，各論において，六朝より，唐末・五代におよぶ，この時期に特徴的な諸現象のうち，七つの事項について，詳しく論究した。

第一部は，中世中国語の語法と語彙の全体概況で，この時期にきわだつ複音節語の増加，ある単語の接尾辞化，使成式，把字式，被動式，使役式などの語法の発展，「是」の繫辞化の進展，疑問文の展開を述べ，語彙の面では，名詞，代名詞，数詞，量詞，動詞，形容詞，副詞，連詞，介詞，助詞におよぶ全体の史的展開と中古期における諸特質を述べた。

第二部，各論において，一，「這」と「那」の検討を行ない，この指示詞の起源をたずねる場合，音韻を中心として溯源すべきことを述べた。すなわち，唐末の ca（這）や na（'da）（那）の音声表記にもとづき，これを上古の舌音系音韻に徴すべきこと，したがって，文字表記にこだわり，「這」に対する「之」や「適」，「那」に対する「若」「爾」などを語源としてはじめから特定化することは実態をゆがめるおそれのあることを指摘した。つぎに「這」と「那」の二分的対立を上古語の指示詞の体系に対応させるとき，上古語の場合も舌音 t 系・ts 系（斯，是，玆）が近称で一類をなし，舌音 n 系（爾，若），牙喉音（其，焉，渠），唇音 p 系（夫，彼）が遠称として一類をなす二分的対立として把握すべきこと，遠称のうちの n 系は比較的近いところを指す場合に用いられ，牙喉音，唇音は比較的遠いところを指す場合に用いられたが，いわゆる「中称」として弁別されるにはいたっていなかったと考え，漢語の指示詞は上古以来二分的対立として存在し，それが中古に「這」「那」として単純化することを述べた。

二，中世中国語における疑問詞の系譜

まず，a）疑問詞「底」について，上古末期に出現するこの疑問詞が，「等」などと関連し，おもに南方で用いられたらしいことに注意した。また，「底物」などがおそらく「是物（勿）」と関連するであろ

うとして，ここに疑問詞の系譜をたどろうとした。b）の「甚麼」の成立は，およそつぎのような変化をたどり，唐末に現在の語形が成立したと考えられる。「是物（勿）」が舌音から歯音へ，音韻変化の影響を受け，唐末に「是没」などの表記が śima の音形を持つにいたった。これが sandhi 現象により，śi-muət > śi-ma > śi^{m}ma > śim-ma となり，śi は sandhi により śim と m 韻尾をそえるにいたり，ここに「甚謨」「甚没」から「甚摩」「什摩」，そして宋代に「甚麼」「什麼」が登場するにいたる。第二音節の「摩」「麼」は入声の舒声化により用いられるようになるが，宋以後にも「末」など声調のちがう表記を持つのは，第二音節の軽読のためであろうと考えた。

三，使成複合動詞の成立過程の検討

使成複合動詞とは行為とその結果を同時に表現しうる複合動詞で（酔倒，打壊など），中古期にもっとも特徴的な言語現象であるが，上古語からこの現象があるとされた説を駁し，その成立過程を把えなおそうと試みた。この複合動詞の成立過程はつぎのような三つの大きな段階に分けられる。

1）動詞の連続用法。これはつぎのように細分される。

a）○而○之型式〔射而殺之（左伝宣公11年）〕

b）—(1)○之○型式〔射之死（左伝昭公21年）〕

(2)○兼語○型式〔風吹窓簾動（華山畿）〕

(3)○賓語○型式〔冷落若為留客住（白居易・寒亭留客）〕

1）は一種の連動式用法および兼語式の用法で，これが使成複合動詞成立のみなもととなる。ただし，成立の起源をなす要素はこれらにとどまらず，広汎な複音節化現象およびそのうちの同義・類義結合などとの競合，あるいは使役式文との関連なども考えられる。

2）の段階は 1）と相関関係にたつが，動詞の連用で，つぎのように細分される。

a）動詞の等立的連用。〔顛倒（仏本行経1），抜尽（〃6），断絶（仏所行讃5），悩乱（〃3）〕

b）連用動詞の慣用化および定型化。〔断滅，帰滅，磨滅（中本起経），消滅（羅什訳法華経）。領取，把取，拾取（遊仙窟）。埋却（舜子変），殺却（韓愈・病鴟），焼却（李陵変文）〕

c）第二音節動詞の自動詞化〔撃破（史記・項羽本紀）——等立的連用——から鑽破（遊仙窟），「著破」（王建・宮詞）へ。

この段階を経て，3）の使成複合動詞化にいたる。すなわち，a）等立的連用における等立性が消失し，b）複合語としての単語化が行なわれ，慣用を経て，のちに，c）第二音節を占める動詞が補助動詞化するのである。つぎに，この使成複合動詞化の認定基準は以下のようであるべきである。①二つの動詞 AB が結合し，A は動因をあらわし，B は動果をあらわす。② AB 各形態素は結合によって語義に変化を来たすことが客観的に証明される。③ AB の結合により，ひとつの新しい意義を表わし，一単語として定立する。以上，すなわち，後続動詞の自動詞化や，「殺」と「死」による認定基準とはべつに，上述のような認定基準を提出し，中古初期にも使成複合動詞化が起こっていることを述べた。

四，動詞「著」については，その変化の歴史をたどって，1）発生から原義，2）中古初期の破読，3）等立的連語の形成，その慣用化，4）使成複合動詞化から，5）補助動詞化までの歴史を通時的に検討した。漢語の動詞のうち，多岐にわたる変化と働きを持つ動詞のひとつの典型としてこれを扱ったのである。

五，指示副詞「恁麼」考は，唐代に起源を持つ「恁麼」の考察である。その変化は，

唐 ──→五代──→ 宋

与摩
異没──→伊摩──→恁麼
任摩

この表記に対応する音声的変化は，

yi-muət > yi-ma > yi^{m}ma > yim-ma（唐末ごろの漢蔵対音の表記による）

以上のようであったと考えられる。

つぎに，この単語の文法的機能について言えば，「恁麼」は「そのように」と「このように」とを兼ね，「只麼」の働きをも包摂し，宋代には「恁麼」のみが圧倒的に多く用いられるようになる。従来の説では，只麼──近称。恁麼──中称。与麼──遠称などとされたが，「与麼」と「恁麼」は同一音韻の異なる表記であるからこの三分法は成立しない。漢語の指示詞はやはり，近称：遠称のみの二分的対立であったと考えられる。この場合も，「只麼」：「恁麼」の対立であるが，「恁麼」などのように指示副詞（あるいは指示形容詞）として働く場合は，とくに「そのように」と「このように」を一語に兼ねる傾向がつよく，ここにも，漢語における指示する働きの特色を見ることができると考えられる。

六，連詞「従渠」については，唐代に発達する縦予の表現の検討である。「たとい……でも」と縦予をあらわす連詞が唐代にいたって急激に複合化する。「従渠」はそのうちのひとつで，中古の一時期に用いられ，やがて間もなく淘汰されてゆく。「従渠」は「遮渠」「儘渠」「饒渠」「従他」「任他」「任你」などに伍して，縦予の表現の拡大に参与する。もともと，縦予の連詞は上古以来の「縦」から，「縦饒」「縦使」「縦令」「縦然」「縦是」「仮饒」「饒你」「直饒」「遮莫」「即令」，あるいは，「任」「任教」「任伊」「任是」「任饒」，「従」「従是」などと複合し，多数の単語群を形成する。これらの新生の単語は一時におこったものではなく，段階を追って増加し，「従渠」「従他」の前に「縦」「縦饒」があり，「従渠」のあとに「任饒」「仮饒」「儘他」「任是」が新しく結合している。複合関係は「縦」「従」「任」「儘」「饒」ともに「ゆるす」「まかせる」という共通の語義を持ち，複合化の際はこの共通の意義素を紐帯として増加が行なわれている。「従渠」の場合は，「したがう」意から条件句の転接をあらわす連詞として転用され，意味・機能の転移がおこった。縦予の表現自体も唐代に既存の限界の拡充，内部の構造の変容が認められる。仮定の「仮使」から「仮饒」が生じ，譲歩の「雖然」から「縦然」がつくられる。なぜ，唐代に縦予の連詞がとくに発展するかと言えば，(1)仮定と譲歩の中間にあって，浮動する表現であるためであり，「もし（かりに）」から反転して，「……しても」と上句に仮定を言いつつ，下句には予期に反する結果を述べる，この言い方が造語にきっかけを与えたかと推測される。(2)単に「もし」と言うよりは強く，譲歩の連詞よりも相手にうったえる力を持つ。それは，より切実な表現を持とうとすることばの発展の方向にそうものとして，唐人に好まれた表現であったと考えられる。

七，接辞「生」について──語彙史研究方法論の試み──は，唐中期から宋代に流行する「生」をともなう語形をとりあげ，これを例として，語彙の歴史はいかに記述すべきかという研究方法についての試みを行なった。

いわゆる単語家族を設定する方法は語彙・語義の総合研究であるが，後代の諧声系統によらぬ新生の語

彙，口語の仮借表記などは，これを語形の面から分析・検討し，語形の共通性の帰納から，類推発展した語彙の意味単位として認定しうるまとまりをぬき出し，その内部に見出される規則性を把握すべきである。「生」の場合は，(1)太○生(2)○生(3)生○の三つの結合方式がある。この形態素「生」は，人・事物に対し，描写を加える際にそえられる接辞で，「太忙生」などと述語となり，「好生」などと副詞にもなり，詞性を変える機能を持つ。そこで，「生」の意義素は「状態を強調する接辞である」と規定しうると考えた。

「生」のように独立した意味を持たず，機能として働く音韻の場合，言語意識はどのような類推・統合を行なうか。語彙史の記述には，これらへの配慮も行なわれなければならない。各時代ごとの記述研究が精度を増すためには，すくなくとも，上記のような手はじめの作業はどうしても必要であろう。すなわち，語義の派生，複合の際の変化を調査し，関連するグループをまとめ，共時的検討を加え，語形の共通性から，造語・派生における規則性を発見する。このようにして，小範囲の規則性のつみあげから，相互に錯綜する語彙群を整理してゆく，などという基礎的作業がまず要請されると考えられるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国語（主として俗語）の語法と語彙の歴史的展開を論ずる。中世とは六朝より唐・五代までをいう。

第一部は，この時期にみられる語法と語彙のいちじるしい変化について，近年の内外学者の説を参考しつつ，包括的に述べ，要点を尽くしている。

個別的な問題を論究した第二部七章が本論文の主体をなす。ここで取扱われた諸問題を集約すれば，次の三つとなる。㈠指示詞・疑問詞およびこれらと関係のある副詞や連詞（接続詞）の語源と語法的発展，㈡動詞の複合とその補助動詞化，㈢接尾辞の発展。

㈠指示詞の体系は，中国の古代語では遠称・中称・近称の三分法であったと説く学者があるが，中世にもなおそうであったとの説を排して，著者は近称と遠称の二分法を取る。「這」と「那」がそれである。この二語の語源は明らかでないが，著者は，近称の「這」は古代語の「此」と同じ語根の変形とし，遠称の「那」の方は疑問代名詞としても用いられるところから，疑問詞より指示詞へ転化したであろうと言う。この転換の過程は，なお充分にあとづけることができないけれども，著者の見解は妥当であり，従来の諸説より数歩を進めたものである（第一章）。

第二章に論ぜられた(a)疑問詞「底」の由来と来歴，(b)「甚麼」の成立に関して，著者は(a)「底」（現代音 ti）の語源を「是」（現代音 shih）に求め，「是」はいまは歯音の摩擦音であるが，もと舌音の閉鎖音が古代より中世にいたるあいだに変化したものであり，文語では摩擦音になったけれども，口語（特に中国東南部の方言）では t- 類の子音を保持していて，それが北方中国の首都（長安）地域の言語にも用いられるようになったのが「底」であるとする。ただし「底」が方言の単語だとの意識は失われなかった。(b)「甚麼」も「底」（または「底物」）と同義の疑問詞であるが，その前身は「是没」「拾没」「什麼」と書かれる語であり，「是」に接尾辞 -ma がついてできたと著者は定める。ma そのものが本来疑問詞であった可能性がある。「是」はもともと指示詞（これ）であって，ここでは指示詞より疑問詞への転換が

おこった。すなわち前項（第一章）の場合と転換の方向は逆になる。しかし中国語におけるこの二つの品詞の内部にある深い関係の指摘はすぐれたもので，これによって従来の諸説は整合的に解明される。

第五章，指示副詞「恁麼」の考察においても，この単語の表記法の史的変化を中国南部の方言における音韻変化と関連せしめて説いたところは，諸家の考え及ばなかった新しいものであり，この問題はほぼ解明されたと考えられる。

㈡は，中国語で，もと単音節の動詞がそれぞれ自立していたのが，中世以降，二個の動詞が複合してゆく過程を考察する。第三章において，著者はその一種「使成」構造の成立を論ずる（使成構造の前の動詞はある動作を，後の動詞はその結果を言い表わす）。著者は古代語にすでにこの構造の複合動詞があったとする説を批判して斥け，動詞の等立的連用から，連用動詞の慣用化さらに定型化にいたる過程を，多数の実例によって細かにあとづけた。古い訳として伝わり，実は後世に造られたとの疑いのある仏典が，のちの訳に比べて語法上で古い特色を保っているもののあることを指摘した如き，注目すべき見解がこの章に含まれる。

第四章は，「著」を後付成分とする複合動詞の成立過程を論じ，六朝以来，仏典にこの形の動詞が頻用され，単独で用いられた場合に多く執著の意味があることに着目して，そこから「一著」が持続をあらわすようになるとしたのも，すぐれた指摘である。

㈢接尾辞の研究に属するものに，第七章，接辞「生」の考察がある。この語は形容詞の前や後について，程度の甚しいことを表わしたが，中世では，しだいに後につく場合が多くなって，接尾辞の一種となる。他の章でも，複合語の第二音節が接尾辞に化する傾向は処処で説かれる。それは中国語（俗語）の史的展開の中で特にいちじるしい現象であるから，更に深い論究が望まれる所であった。

著者が論を立てるに当って，おもな資料としたのは(1)世説新語，遊仙窟，(2)敦煌出土の変文の類，(3)祖堂集などの禅宗語録の古いテクストである。これらのうち，(2)と(3)は著者によって特に綿密に調査され，テクストの異同の処理も行き届き，著者の研究の確固たる基礎をなしている。それらを全面的に活用し，唐代語法史の諸問題の解明がなされた。著者は従来の学者の偏見を脱し，注目すべき多くの新見解を提出したが，おおむね妥当と認められる。変文その他のテクストの解釈に，いささか異議を挾むべき処なしとしないが，決して大きな欠陥ではない。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。